

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02568

研究課題名(和文) 18世紀ドイツにおける人間学的転回と近代文学の成立

研究課題名(英文) The Anthropological Turn and the Establishment of Modern Literature in 18th Century Germany

研究代表者

津田 保夫 (Tsuda, Yasuo)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・教授

研究者番号：20236897

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀中頃にドイツで起こった思想史および学問史における人間学的転回によって、近代の新しい社会的現実の中で生きる人間の姿が経験的事実において観察され、身体と精神、理性と感性、意識と無意識などに分裂した近代の人間ともいえる新しい人間像がもたらされた。文学においてもそのような分裂した人間の姿が対象となり、その調和的総体性の回復への試みがフマニテートの理念のもとに様々な形で試みられた。そのようにしてドイツにおける近代文学は成立し、近代の人間の様々な姿や内面の深層を描き出すことができるようになったが、総体性回復の試みは当時の時代状況のために、必ずしも十分な成果を上げることはできなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、思想史および学問史において提示された人間学的転回を文学史に適用し、それが近代文学成立に大きく関わっていることを明らかにした点である。すなわち、人間学的転回は近代の人間ともいえるような新しい人間像をもたらしたが、そのような人間を文学が対象として扱うようになり、それによって近代文学といえるような新しい文学形式が成立してきた過程を示したのである。またそのようにして始まった近代文学は、その理論と実作において近代の人間が喪失した調和的総体性の回復の試みを様々な形で行っており、それは現代および将来における新しい文学の可能性を考えていく上でも大きな意義を有するであろう。

研究成果の概要(英文)：In this study I researched the process of the anthropological turn and the establishment of modern literature in 18th century Germany. Philosophers and scientists in this period observed the people living in new social realities and discovered new human types that could be called modern humans. The modern humans were divided into body and soul, reason and sensuality, consciousness and unconsciousness. The fragmented personality of the modern human was also an important subject of literature. In literature at that time, literary people made some attempts to restore the lost harmonious wholeness. In this way, modern literature in Germany was established, and it became possible to depict various human figures and the insides of modern humans. However, the attempts to restore harmonious wholeness of modern humans have not yielded sufficient results due to the social circumstances of the time.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 人間学 近代文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「人間学的転回」とは近年のドイツ思想史研究において提示された新しい概念である。シュミッテ=ビッグマンとヘーフナーは、18世紀中頃に形而上学的世界像から社会文化的生活世界における人間への関心の移行という思想史的な変化が生じていることを指摘し、これを「人間学的転回」(anthropologische Wende) と呼んだ。(Wilhelm Schmitte-Biggemann / Ralf Häfner: Richtungen und Tendenzen in der deutschen Aufklärungsforschung. In: Das achtzehnte Jahrhundert. Jg. 19 (1995), Heft 2) これは同時に初期啓蒙主義の体系的思考から後期啓蒙主義の経験的思考への転回をも意味しているのだが、ツェレはこの転回が1840年代のハレ大学を中心とする医学者や哲学者たちの活動にまで遡ることができると主張し、バウムガルテンやマイアーの美学とクリューガーやウンツァーらの心理学を代表例として挙げている。(Carsten Zelle (Hg.): Vernünftige Ärzte. Tübingen 2001) この問題はその後思想史研究では取り上げられ、文学研究でも付随的に言及されることはあるが、文学史においてその全体像を把握しようとする研究はいまだ欠落している。しかしながら、この概念は18世紀ドイツにおける近代文学の成立という文学史的問題を解明する上でもきわめて有効だと考えられる。

この文学史的問題を考究するさいに援用しうるのが、「近代のプロジェクト」の概念である。ハーバーマスは1980年のアドルノ賞受賞記念講演『近代 - 未完のプロジェクト』で、18世紀の啓蒙主義哲学者たちが表明した客観的科学や普遍主義的法・道徳や自律的芸術の自律的展開およびそれによる理性的生活の形成を「近代のプロジェクト」と呼んだ。G. ベーメはこのプロジェクト概念を一般化させ、「近代」が人間によって構想され普及され推進された「プロジェクト」であるとして、学問・自然・歴史とならんで「人間」をそのような意味でのプロジェクトの観点から見直そうとした。(Gernot Böhme: Einführung in die Philosophie. Frankfurt a.M. 1994) 文学研究の分野では、シラーの人間学を「人間というプロジェクト」として論じたベスマンの研究(Holger Bösmann: ProjektMensch. Würzburg 2006) など個別的問題の研究はあるが、文学史においてプロジェクトとしての近代的人間の成立を総合的に解明することは、まだ重要な課題として残されている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、18世紀ドイツ思想史および学問史において初期啓蒙主義から後期啓蒙主義への移行のさいに生じたとされる「人間学的転回」が、当時の文学においてどのような形で現れたのかを様々な観点から文献資料調査により明らかにすることである。

そこでとくに論証したいのは、思想史上の人間学的転回によって「近代のプロジェクト」としての新しい「近代的人間」像が形成され、当時の文学が「近代文学」として、このプロジェクトの推進機能を果たしていたのではないかという仮説である。

それによって、18世紀ドイツにおける近代的人間像と近代文学の成立過程をその相互関係において明らかにするとともに、当時の文学が近代社会および近代的人間の形成に対して果たしていた役割とその機能のメカニズムを解明する。そのさいにとくに重点的に考察を行うのは、次の二つの問題である。

(1) 初期啓蒙主義から後期啓蒙主義にかけての人間学的転回による人間観の変化の諸相

17世紀にデカルトの心身二元論によって、人間は思惟実体としての精神(あるいは魂)と延長実体としての身体とに峻別され、前者は哲学や形而上学において、後者は医学や生理学において、それぞれ別々に扱われた。しかし人間学的転回によって、それまでの神学的あるいは形而上学的人間観は衰退し、人間は精神と身体の一合体として捉えられ、経験的事実において考察されるようになった。この新しい学問的潮流はのちにプラトナーによって人間学の名称が与えられることになるのだが、そこで見えてきたのは、精神と身体がその調和を喪失して分裂した病める人間の姿であり、それは熱狂やメランコリー、狂気や犯罪や自殺などといった形であらわれ、文学はこれを好んで題材やテーマとして扱っている。本研究は、このような人間学的転回によって変化した新しい人間観を様々な観点から明らかにする。

(2) 18世紀ドイツ文学におけるプロジェクトとしての近代的人間像と近代文学の成立状況

上記の思想史および文学史における「人間学的転回」は、それまでとは異なる新たな人間像をもたらしたが、それは「近代的人間」と呼ぶことができるものであろう。そして同時代の文学はまさにそのような近代的人間の姿を描き出し、その様々な問題点をテーマとして扱うようになった。しかし他方でまた文学は、そのような近代的人間の向かうべき方向をプロジェクトとして「人間性」(Humanität)の理念のもとに示し、同時にそのプロジェクトを推進する機能をもっていたと考えられるが、そのような文学はまさに「近代文学」と言えるものである。そこで本研究は、当時の文学が近代文学として、近代的人間や人間性の理念をどのようなものとして提示し、そのプロジェクトの推進機能をどのように果たすようになったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は主として、図書館等での文献資料収集調査、資料の分析と考察、他の研究者たちとの意見交換や討論(学会発表やシンポジウム等を含む)により進めていく。本研究の対象は、思想史的領域と文学史的領域とに大別されるが、これらの相互関連を常に考察しつつ両領域の調査を平行して行う。また時代的には18世紀半ば頃の人間学的転回期およびそれ以前とそれ以後とに便宜上区分し、それぞれの時期における思想史的および文学史的な状況とその変化を調

査する。内容的には、精神と身体（あるいは自然）、理性と感性（あるいは理性の他者）、意識と無意識という三つの対立軸を作業仮説的に設定し、これらの座標上において、上記の各時期における思想上および文学史上の人間像とその変化を把握する。

4. 研究成果

(1) 学問史および思想史における人間学的転回

18世紀はカントが「啓蒙の世紀」と呼んだように思想史的には啓蒙主義の時代にあたる。しかしトマジウスやヴォルフらの合理主義的哲学が展開された前半と、カントやモーゼス・メンデルスゾーンが「啓蒙とは何か」の議論を『ベルリン月報』誌上で行った後半とでは、様々な点で異なる傾向が認められ、初期啓蒙主義と後期啓蒙主義とに区分できる。シュミッテ＝ビッグマンとラルフ・ヘーフナーは、初期啓蒙主義の体系的思考から後期啓蒙主義の経験的思考への移行が同時に形而上学的世界像から社会文化的生活世界における人間への関心の変化という思想史的な転換をも示していることを指摘し、これを「人間学的転回」と名付けた。それは人間学や美学、経験的心理学などの新しい学問への関心と結びついた文学が隆盛してきたことにも表れている。

これに対してツェレは人間学的転回が1740年から50年頃のハレ大学で哲学と医学と神学の三分野の学際的な交流関係において起こったと主張した。ハレは1694年にブランデンブルク選帝侯フリードリヒ三世による新しい大学が、また翌1695年には敬虔主義者フランケの貧民学校が設立され、啓蒙主義と敬虔主義の重要な拠点となっていた。そのような土壌の上に、パウムガルテンやマイアーによる感性的認識の学としての美学や、クリューガーやウンツァーらによる心身相関的医学が成立した。そしてこれらの新しい学問こそがまさに人間学的転回の特徴を顕著に示しており、その興隆の時期が1740年から1750年頃にあたる。

17世紀末に新設されたハレ大学は、18世紀半ばまでにはドイツ語圏で最も重要な大学の一つとなったが、そこでは啓蒙主義の理念が本気で取り上げられ、「<研究と教授の自由>」が推進され（ハンス＝ヴェルナー・ブラール（山本允訳）『大学制度の社会史』（法政大学出版局1988年）143ページ）でいた。その創設にさいして重要な役割を果たしたのはドイツ啓蒙主義の創始者ともいわれるトマジウスであり、彼はドイツ語で講義を行っただけでなく、フランスの宮廷文化をドイツの大学改革のための手本とし、フランス文化の理想の基盤にある行儀や学識、賢明さや礼節などの美德を自身のうちに調和させた「理想的な人格の持ち主の養成」を大学改革の出発点とした。また、ドイツ敬虔主義の代表的指導者フランケも1698年にハレ大学神学部の教授となり、ハレはやがてドイツ敬虔主義の重要な拠点ともなっていた。医学ではフリードリヒ・ホフマンとゲオルク・エルンスト・シュタールという二人の有力教授が招聘され、ハレ大学医学部はライデン大学にも匹敵するほどになった。彼らはそれぞれ機械論と生氣論という相異なる立場を取りながらも、人間において身体と精神が相互に関連しているという見解において一致しており、その後の人間学的転回を準備することとなった。

そして1706年にクリスティアン・ヴォルフが赴任すると、明晰な概念や厳密な論証に基づく体系的理論を追究する彼の哲学方法は学生たちの人気を集めた。彼は心理学を合理的心理経験的心理学に区別し、人間の認識能力を上位認識能力と下位認識能力とに分けた。彼の後に私講師となったパウムガルテンは、感情や情念といった下位能力に着目し、新しい感性的認識の学としての美学を提唱した。その後任となる弟子のマイアーは美学を継承発展させるとともに、1744年の著書『情動全般に関する理論的教説』で「人間における情動の学問」を構想した。

医学の分野では、ホフマンの機械論とシュタールの生氣論を調停させようとする試み、さらには医学と哲学を融合させようとする努力がなされるようになった。ウンツァーは1746年に『情動に関する新教説』や『身体への魂の影響に関する考察』を発表し、「魂と身体は物理的に交互に作用している」ことを論じた。また1750年の『人体全般に関する哲学的考察』では「哲学と医学の間に成立しなければならないであろう中間的学問」を見いだそうと努力し、人間の身体を「自然本性」(Natur)という観点から考察した。彼は1759年から1764年にかけて『医師』(Der Arzt)というタイトルの通俗的な医学雑誌を刊行するようになるが、これは多くの読者に購読されて大成功を収め、新しい人間学的医学を広く普及させる重要な媒体となった。

またウンツァーの師のクリューガーは経験的事実に基づいた観察や実験による心理学を重視し、1756年の『実験心理学試論』で「医学と哲学の間の姉妹的結合」という観点からそのような新しい心理学を構想した。この実験心理学では人間の特殊な心理的現象の観察や考察が行われ、後半には付録として、とつぜん白髪になった人物、ヒポコンドリーの治癒、記憶喪失、想像力の異常な作用、メランコリー、予知夢、夢遊病者など多数の症例記録が掲載されている。同じくクリューガーの教えを受けたエルンスト・アントン・ニコライは、心身の相互交渉の問題において「想像力」の機能を重視し、1744年に『人間の身体に対する想像力の作用』を著して、想像力が身体に及ぼす様々な影響について考察した。彼はまた、想像力に心身相関的な病的状態に対する治療手段としての可能性を見いだすことも試みた。

このようにして18世紀中頃に起こった新しい心身相関的な医学やそれと関連する学問領域は、1772年にプラトナーの『医師と哲学者のための人間学』によって「人間学」の名称が与えられる。パウムガルテンらによって始められた感性的認識の学としての美学や情動論は、その後ズルツァーやレッシング、ヘルダーらへと引き継がれ、芸術論や文学論とも深く結びついていく。またクリューガーらによる心理的事例の観察や考察を中心とする経験的心理学もモーリッツらに継承され、その具体的事例は文学作品にも用いられるようになっていったのである。

(2) 経験心理学と文学における新しい人間像の記述と描写

18世紀中頃の人間学的転回によってもたらされた新しい人間観察の方法は、人間を身体と精神の交互作用において捉え、経験的事実において具体的な現象を記述したが、そこで表れてきたのは身体と精神が分裂し調和を喪失した分裂した近代の人間の姿であった。そしてその観察記録はとくに、ヴォルフからクリューガーらへと続く経験的心理学の流れを発展的に継承したモーリッツの『経験心理学雑誌』(1783-93)などに多数掲載されているが、文学もまたそのような具体的な症例記録の中に素材やテーマを見だし、様々な苦悩する近代の人間の姿を文学作品において描くようになった。その重要なテーマの一つに無意識の問題がある。

無意識は19世紀末にフロイトによって初めて発見されたのではなく、すでに1776年にエルンスト・プラトナーの『哲学的アフォリズム』の中で「無意識」(Unbewußtseyn)という言葉自体が用いられており、人間の心の奥底に意識の届かない暗い領域があることはそれ以前にも指摘されていた。このような人間の心の奥底の無意識的領域は「魂の根底」(バウムガルテン)、「魂の深奥」(ズルツァー)、「人間の魂の暗い深淵」(ヘルダー)などと呼ばれており、この「無意識の途方もない領域、この真の内部アフリカ」(ジャン・パウエル)への調査探検の試みは、すでに18世紀ドイツの経験的心理学において様々な形で行われていたのである。

モーリッツの『経験心理学雑誌』にも、そのような無意識的領域に関連する様々な事例が収集されている。そこでは人を動かしている「内なる駆動機構」を知るために、人間の「魂の最奥部で」起こっていることが注意深く観察される。このような方法は文学においても応用されており、その一つの実例をシラーの戯曲『群盗』(1781)に見ることができる。

『群盗』は題材を同郷の詩人シューバルトの『人間の心の物語のために』から得ているが、シューバルトは「人間の心の奥底まで降りていって、あらゆる行動の受胎まで感じとり、そうして人間の心の物語を書くような哲学者がいつ現れてくるだろうか」と述べ、たんなる外的な出来事や行動だけではなく、それを引き起こす原因となる人間の心の中をも描くような物語が書かれることを希望していた。シラーはまさにその要請に応じて、この敵対する兄弟の逸話から劇作品を書くことを企てた。シューバルトが期待する「人間の心の物語」を書くためには、「人間の心の奥底」まで降りていき、あらゆる人間の行動の源泉を心の奥底の無意識的領域まで遡って、そこから人間の行動が生じる過程を示さなければならない。そのためにシラーは「魂をそのもっとも秘かな動きにおいて捕らえる演劇的手法」を用い、それによって登場人物たちの行動をその「内なる歯車装置全体」すなわち心の中にある隠れた動機から描き出そうとしたのである。

それがもっとも明確に表れているのは弟フランツの悪徳的行為であり、その原因となっている「内なる歯車装置」は彼の心の中にある唯物論的で無神論的な価値観や世界観である。しかしシラーは心のさらに奥底の無意識的領域に潜むものまで描き出そうとした。それはフランツが意識では否定あるいは無視しようとしながらも無意識的に生じてくる罪責感と良心の呵責である。フランツは意識では自分の行動を正当化しながらも、「良心の曖昧模糊とした戦慄」や「裁きの感情」や「宗教の厳粛な声」にたえず苛まれ、それはやがて悪夢となって現れる。彼は死者たちの霊が墓から出てきて「人殺し」と責め立てる夢を見て怯えるのである。

その一方で彼はまた、「病気が脳を混乱させて馬鹿げた奇妙な夢を作り出すのであって、夢には何の意味もない」と唯物論的に考えようとするが、このとき彼の心の中では、意識的な唯物論的説明と無意識的な夢の恐怖との葛藤、すなわち意識と無意識の対立が生じている。フランツは最終的には絶望の末に自害するのだが、結局のところ彼の破滅は、彼自身の無意識への敗北によってもたらされたと考えることができる。シラーは『群盗』において、そのような近代の人間の内面における意識と無意識の分裂と葛藤を外来的な出来事や行動において描き出している。

シラーはまた小説『名誉喪失による犯罪者』でも犯罪者の外的行動をその内面的原因との関連において分析した。つまり、犯罪者の犯罪行為を描くにあたっては、「彼の思考の源泉の方が彼の行為の結果よりなおのこと重要」なのであり、その犯罪行為の原因は「人間の魂の普遍の構造と、それを外的に規定する可変の諸条件」に求められなければならない。シラーがこの小説で試みたのは、犯罪者クリスティアン・ヴォルフの「悪徳の解剖」であり、それによって犯罪的行為の原因を彼の心の内面の奥底にある無意識的領域まで立ち入って解明しようとしたのである。

シラーの文学作品では無意識は意識との対立において、意識よりも強力なものとして現れ、ときには人間を破滅する力をも持つものとして描かれている。このように人間の無意識的領域の問題は、フロイトより一世紀以上前の18世紀の経験心理学や文学において、すでに重要なテーマやモチーフとして扱われていた。そして近代の人間のこのような意識と無意識あるいは外面と内面の関連ないし対立葛藤を描き出すことこそ、この時期に成立した近代文学の大きな特質の一つであり、それは19世紀のロマン主義文学へと継承されていくことになる。

(3) 近代の人間像と近代文学の成立

人間の外面的行動をその内面的過程と関連させて描き出すという点を文学の特質として全面に打ち出した理論的著作が、1774年に発表されたブランケンブルクの『小説試論』である。この時期にはまだ小説という文学ジャンルは、演劇や叙事詩といった伝統的な文学ジャンルと比

べると低く見られていた。そこで彼はヴィーランドの『アガトンの物語』を一つの模範にとり、小説を近代的な文学ジャンルとして、理論的に確立しようと試みたのである。

彼の文学的価値観はホラティウス以来の「教え楽しませる」という古い伝統を引き継いでいる。しかし、古代人とは異なる時代を生きる近代人としての同時代の人々にとっては、古代の文学形式である叙事詩とは異なる新しい文学形式としての小説こそふさわしいものだとは考えていた。そしてそのような近代人に対して「楽しませる」という美的効果と趣味や習俗を改善するという教育的効果を十分に発揮するためには、近代文学としての小説はどのようなものでなければならないかという問題が、『小説試論』では論じられている。その中でもとくに近代小説の理論としての顕著な特徴を示していると思われるのは、小説の描写対象としての人間、内面史の概念、そして読者への教育的機能の三点である。

ブランケンブルクは『小説試論』の序論の中で、長編小説が今日の時代の産物であることを指摘し、古代の叙事詩と対比させる。つまり、叙事詩は古代という時代を背景として生まれた文学ジャンルであり、その時代には人間は「公民」すなわち「ある国家の成員」であったのに対し、近代において人間は公民である前に何よりもまず「人間」であり、長編小説はまさにそのような時代の文学ジャンルなのである。したがって近代という時代の文学としての小説においては「ありのままの人間性」すなわち「習俗や身分や偶然が与えるあらゆるものを剥ぎ取られた人間性」こそが小説の描き出すべき重要な要素となる。つまり、叙事詩の描く対象が「公的な行為や出来事、すなわち公民の行動」であるのに対して、小説のそれは「人間の行動と感情」なのである。そこで小説作家には「数多くの観察」と「人間の自然本性の知識」が必要となり、「人間を研究する」ことが求められるのだと答えられる。それというのも、「人間の内面と外面はきわめて密接に関連しているので、外面の現象と人間の表出全体を説明し理解しようとするならば、必ずその内面を知っていなければならない」からである。したがって小説家は「起こった物事の表面や外観」だけではなくむしろ「どのようにしてそれが起こったのか」という過程、すなわち「情念の発生と進行と生成の全体」を「内的小および外的な因果関係の結び付き」において描き出さなければならない。それをブランケンブルクは「内面史」(innere Geschichte)という概念で表現し、この「内面史」こそが「長編小説の本質的で固有なもの」だとした。

ブランケンブルクはまた、「読者に情念を引き起こして、彼らの感情を適正な規模において活動にふさわしい対象へと向けて訓練する機会を与えることが、詩人の仕事である」と述べて、文学の教育的機能をも強調する。そうして彼は、文学が読者の「思考能力」や「感受能力」に作用することによって人間を「完全性」へと導くことを「最終目的」として掲げている。

このようにしてブランケンブルクは『小説試論』において、近代的文学ジャンルとしての小説に人間の発展成長過程をその内面と外面の関連において描き出すという人間学的規定を与え、さらに読者の人間性発展への寄与という教育的使命をも課した。これによって小説は、近代という新しい時代に生きる近代人のための近代文学としての理論的根拠を得たのである。

同年9月にはゲーテの『若きウェルテルの悩み』が出版されベストセラーになったが、翌1775年にブランケンブルクはその書評を発表した。その中で彼は、『ウェルテル』の作者が「どのようにして彼の性格の基盤から次第に彼の運命が展開し生じてきたか」という「一人の男の内面史」を与えようとし、「ウェルテルの思考や感受の仕方の全体が生じて展開していく様子をわれわれはいわば目の前に見た」ことによって、その試みは全体として成功していると述べている。

さらにその10年後の1785年に第1部が刊行されたモーリッツの自伝的小説『アントン・ライザー』は「心理学小説」という副題が付けられ、その冒頭でそれが「人間の内面史を描こうとする本」であると明言されている。それはもともとは彼自身が編集発行人として1783年に創刊した『経験心理学雑誌』で研究事例として断片的に報告されていたものであった。その『経験心理学雑誌』には『アントン・ライザー』と同じような病的な、あるいは異常な心理状態の事例がほかにも数多く掲載されている。そしてその後の時代の小説、とくにロマン主義の小説では、むしろそのような病的で異常な人間の内面心理が好んで描かれるようになっていく。しかし、ブランケンブルクが重視した人間を完全性へと導くというもう一つの大きな目的の方は、必ずしも十分な成果を上げることはできなかったようである。

5. 本研究成果の位置づけと展望

本研究課題では18世紀中頃のドイツで起こった思想史および学問史における人間学的転回の諸相と、それが文学の分野に波及して近代文学が成立した過程を調査し考察した。それによって、思想史および学問史と文学史との密接な関連性のある程度まで示すことはできたと考えられ、それはドイツ文学史研究にひとつの新たな観点をもたらすことにもつながるであろう。

しかしながら、本研究はあくまでも18世紀ドイツという時間的空間的にも限定された領域を対象としたものであった。今後さらに、他の地域や他の時代からの影響関係についても視野に入れれば、より広範かつ明瞭な形で近代文学の特質や成立過程を把握することができると期待される。それについては今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 津田保夫	4. 巻 19
2. 論文標題 人間学的小説理論としてのブランケンブルク『小説試論』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2018	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/72718	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田保夫	4. 巻 18
2. 論文標題 十八世紀ドイツの人間学的転回とハレ大学の学問状況	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2017	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/69973	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田保夫	4. 巻 17
2. 論文標題 シラーにおける文学と無意識	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2016	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/62072	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 津田保夫
2. 発表標題 ゲーテ時代の文学における無意識の理論的背景
3. 学会等名 日本ヘルダー学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----